The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国冬本源氏物語夕霧巻の分断と読解 ： 落葉の宮の人物像を中心に
Author(s)	越野, 優子
Citation	詞林. 2020, 67, p. 60-75
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75583
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/75583　　詞林　第67号　2020年4月

国冬本源氏物語夕霧巻の分断と読解
―落葉の宮の人物像を中心に―

越野　優子

一．はじめに―問題の所在

国冬本は源氏物語の本文のうち、青表紙本系統・河内本系統・別本に分かれる、その別本の一つである。五四冊揃いで蒔絵箱に入れられそのうち十二冊が鎌倉末期津守国冬筆と極め札（古筆了山・琴山）及び作者目録から知られ、故に伝津守国冬等各筆源氏物語（以下国冬本）と称される。現在は天理大学附属天理図書館が所蔵する。相当の錯簡・脱落等もあるが最古の源氏本文とされる国宝絵巻絵詞との類似も指摘される重要な伝本の一つである[注1]。

前述した数々の本文の問題はしかし、不備としてのみ片付けてよいとはしないのが稿者の立場である。例えば巻末欠如（桐壺巻巻末31ウ８行以降）・部分欠如（少女巻８丁ウと９丁オの間に25・６丁の脱落や独自本文）・一帖丸ごと欠如（題簽は「匂ふ兵部卿、中身は夕霧巻の一部）などは、それぞれ、

・桐壺巻末欠如→光る君命名伝承の問題

・少女巻部分欠如と独自本文→夕霧の人物像と二条院増築

という、物語の読みにも関わる問題が検出されている。また最も大きな欠如である匂宮巻本文無しについても述べた[注2]。

一方欠如の反対として増幅（鈴虫巻）がある。539字にも及ぶ独自本文があり、そこにも独自の物語世界が見出される[注3]。

本稿では欠如でも増幅でもなく分断された夕霧巻について考える。既に岡嶌偉久子が記したように、国冬本夕霧巻は墨付60丁だがこれは夕霧巻全体の三分の二前後にあたり、残りが「匂ふ兵部卿」題簽の冊子に分けて収納されているのが現在の状態である。この分離されて存在する夕霧巻がどのような意味をもつか、本稿では考えたい。

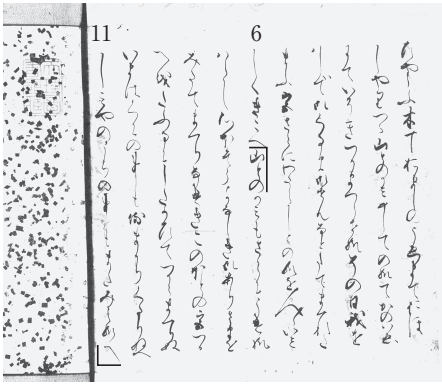
二．国冬本夕霧巻の問題の終わり方―欠如したものと落葉の宮像への影響

まず以下の簡易な表を基に国冬本夕霧巻の書誌について述べる[注4]。

表表紙	極め	書写期	伝称筆者	本文系統	錯簡脱落	独自本文	翻刻所収書名
夕霧	住吉社家津守国冬夕霧	鎌倉末期	伝津守国冬	別本系統	三分の二が夕霧巻に、残りが匂宮巻にある。	国冬本のみ欠けている部分いくつかあり	『大成』『別本集成』。『別本集成』は夕霧・匂宮両巻を合体させている。

国冬本夕霧巻の冒頭は「まめ人の名をとりてさかしかり給大将この一条の宮の御有りさまなおあらまほしと心にとゝめておほかたの人めにはむかしをわすれぬやうにみせつゝいとねんころにとふらひきこへ給」（墨付き１丁オ１～５行）と、他本文と何ら変わることは無い。但し巻末は異なる。

山とのかみもさらにうけたうけ給はらし心ほそくかなしき御ありさまもこのほとの宮つかへをたふるにしたかひてつかうまつりぬ。いまはくにの事も侍（り）まかりくたりぬへし宮のうちの事もまたみ（え）給へ（国冬本夕霧巻60丁ウ　６～11行・傍線稿者。（　）は青表紙本系統との相違の箇所）[注5]。



（**図１**　天理大学附属天理図書館蔵　国冬本夕霧巻巻末と見返しの一部　60丁ウ　11行）

この場所は夕霧巻巻末、ちょうど落葉の宮が母御息所を失い頼るべき方もなく、いよいよ大和の守に説得されて泣く泣く帰京する場面の、その大和の守の言葉の箇所である。前述のようにここで夕霧巻は終わり、続きは匂宮巻冒頭「ゆつるへき人侍らす」（１丁オ１行）に続く。この分割の仕方は意味を考慮してではなく物理的な分割と考えるのが妥当と考えられる。丁数は夕霧巻が墨付計六十丁・匂宮巻が計二十五丁で枚数も不均等である。

この不均衡さについて注２直近拙稿では「物理的な理由でもなさそうである」と述べたが、この点について自ら別の角度から疑義を唱えると、意図があったにせよなかったにせよ、ここで夕霧巻が終了しているという事実は事実としてある。ここで終了すると何が欠けるのか。

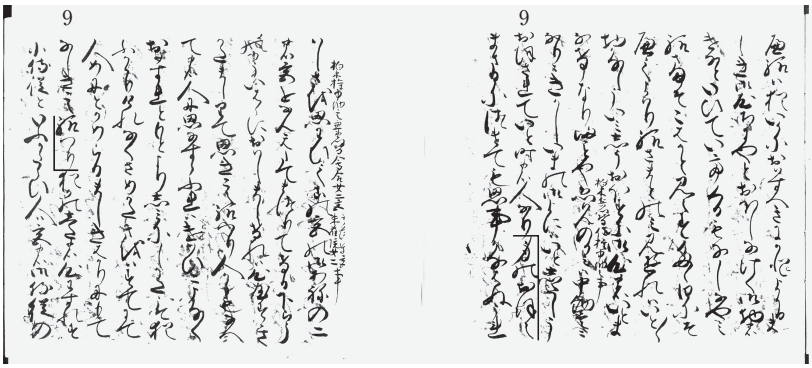
このあと、夕霧巻で起きる出来事について、落葉の宮関連の内容を「落葉の宮物語」として次にまとめて比較検討する(注6)。

落葉の宮物語

１．落葉宮物語の発端。柏木の色好み　　若菜下（巻名）巻名

「身のおぼえまさるにつけても、思ふことのかなわぬ愁はしさを思ひわびて、この宮〈女三宮〉の御姉の二の宮〈落葉の宮〉をなむ得たてまつりてける。下臈の更衣腹におはしましければ、心やすき方まじりて思ひきこえたまへり。人柄も、なべての人に思ひなずらふれば、けはひこよなくおはすれど、もとよりしみにし方こそなほ深かりけれ。慰めがたき

63丁オ　　62丁ウ



（図２　天理大学附属天理図書館蔵　若菜下62丁ウ９行～63オ９行）

姨捨にて、人目に咎めらるるまじきばかりに、もてなしきこえたまへり」

2．柏木、小侍従の手引きで女三宮と密通。落葉宮の態度に不審の心募る。　若菜下

3．柏木、女三宮への恋に死す。　柏木

「女宮（落葉の宮）にもついにえ対面したまはて」

4．夕霧、一条宮の落葉の宮を訪れ、和歌に恋情を訴える。　柏木

5．夕霧は落葉の宮を訪問して柏木遺愛の和琴を奏で、ついで落葉の宮の箏と琵琶を掻き合わせた。帰り際、柏木遺愛の笛を受け取る。臨終寸前の柏木が我が子・薫に相承を託していたからである。　横笛

6．落葉の宮は御息所の加持祈祷の為に小野の山荘に移った。夕霧は離れてみて落葉の宮への思慕がますます募るのを実感していた。　夕霧

7．御息所は病気療養のために落葉の宮と共に小野の山荘に移り住んだ。さっそく夕霧は見舞いを口実に小野へと向かったのであった。

8．夕霧の訴えに落葉の宮は固く心を閉ざす。　夕霧

9．御息所から小少将から落葉の宮と夕霧ののっぴきならない関係を聞かされ、心配は尽きない。そんな折、夕霧より「少将の君へ」と消息があった。御息所は消息を代筆した。　夕霧

10．御息所が落葉の宮にとの関係を問いただした消息は夕霧の許に届いたものの、それは雲居の雁に奪い取られて、隠されてしまう。返信を待ち続けた御息所は悲嘆のあまり、その病状は一変した。　夕霧

11．御息所、悲嘆のあまり、薨去。　夕霧

12．父・朱雀院、娘の出家の願いを強く諫める。　夕霧

⑬．**いとこの大和守に、落葉の宮は説得されて泣く泣く帰京する**。　夕霧

14．落葉の宮、夕霧の待つ一条宮に帰る。　夕霧

⑮．小少将、**落葉の宮の籠城する塗籠**に夕霧を導きいれる。　夕霧

16．夜明け方、夕霧ようやく思いを遂げる。　夕霧

17．蔵人少将、父・致仕の大臣の使者として一条宮を訪問。　夕霧

18．源氏亡き後の落葉の宮の動静。　匂兵部卿

「丑寅の町に、かの一条の宮を渡したてまつる。三条殿と、夜ごとに十五日づつ、〈夕霧〉うるはしう通ひ住みたまひける」

19. 匂宮、中君の許で夕霧六の君の返歌を読む。　宿木
「〈夕霧六の君〉継母〈落葉〉の宮の御手なんめり。・・・」
20. 今上女二宮の裳着。薫、婿として迎えられる。　宿木
「「〈夕霧〉めづらしかりける人の御おぼえ、宿世なり。故院〈光源氏〉だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今は、とやつしたまひし際にこそ、かの母宮〈女三宮〉を得たてまつりたまひしか。我はまして、人も許さぬものを拾いたりしや」とのたまひ出づれば、〈落葉〉「げに」と思すに、恥づかしくて御いらへもえしたまはず」

以上が「落葉の宮物語」の記述になる。この後はこの「1.―20.」までのまとめに沿いつつ論を進める。

落葉の宮の人物論を紐解くと、彼女は彼女自身に価値があるというよりは、ある大きな事件が起きる引き金であったり、先取りであったり、そういう脇役的な位置づけにあると考えられる。女三宮との対比でいえば、前掲1.の「落葉の宮物語発端」の記述にあるように、「官位が昇進し女二宮を得たことがその妹である女三宮に対しても何がしかの権利があるように柏木に錯覚させるような出来事だったのではないか」と土方洋一が述べる役割がみえてくる[注7]。また前掲7.にあるように母御息所の病気療養により親子で小野の山荘に移り住むと早速夕霧が見舞いを口実にやってくるが、そこは霧深い山里であった。そこで小野での夕霧との逢瀬を、いずれ描かれることになる宇治十帖の先取りとして位置づけた藤村潔の研究もある[注8]。小野での夕霧と落葉の宮の贈答歌を挙げる。

（前略）まかてんかたもみえすなりゆくはいかゝすへきとかこちて（青表紙本系・とて）
山里のあはれをそふるゆふきりに　夕霧
たちいてんそらもなき心ちして
ときこえ給えは
山里のまかきをこめてたつきりも　落葉の宮
心そらなる人はとゝめす　（国冬本夕霧巻8丁オ～11行・傍線稿者）

（図３　天理大学附属天理図書館蔵国冬本　若菜下巻77オ５行～７行）

落葉の宮は心ならず柏木と結婚するが、柏木は三宮に心を奪われていて前掲１．のように母方の身分の低さもあり朱雀院の寵愛も相応に過ぎぬ存在として貶められている。それを表す典型的な本文が図３である。

もろかつらをちはをなゝにひろいけん
なはむつましきかさしなれともとかきすさみ
たるいろなめけなるしりうことなりかし

国冬本若菜上下巻は上巻が鎌倉末期写／伝津守国冬筆／青表紙本系、下巻が室町末期写／伝飛鳥井頼孝卿写／河内本系とされる。上下ともに特段の独自本文は見当たらない。若菜下は前掲のように傍注があるところが独特である。このような、夫から「落ち葉（おちば）」とも綽名され、いわば物語の進行のための役割としてのみ存在するような人物である落葉の宮が、唯一強い意志をみせたのが夕霧への反発（再婚への忌避）であった。前掲８．の辺りを国冬本で挙げる。

いとほのかにあはれけに
ない給て
われのみやうき世をしれるためしにて
ぬれそふそてのなをくたすへき

（と）の給ともなきを　　（国冬本夕霧巻13丁ウ４行～８行）

ただし再婚の忌避程度であれば、皇女という特異な身分でありまして再婚であるので、拒絶に何ら驚きはない。落葉の宮の拒絶の際の歌もこういう類の状況下で歌われるのに定石的な歌で不自然なところはない。

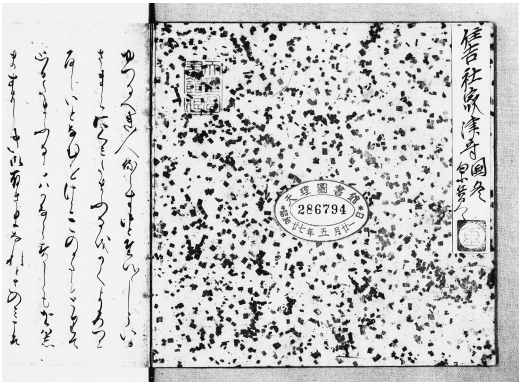
但し落葉の宮と夕霧の関係の特殊さは、前掲８．９．のように実事は無かったのにあったかのように誤解された朝帰りにあった。父朱雀院が「この浮きたる御名を」（国冬本夕霧巻59丁オ10行）のようなことが結果として起きてしまい、その上母御息所薨去で後ろ見という点で非常に脆弱になった為に、逆に良からぬ噂が立てられやすくなったこと、また鍾愛の三宮の出家のあと出家が続くことを外聞としてもよろしくないと考えたが故に朱雀院は前掲12.のように諌めることになる。

院に人の（もらし）そうしけるは「（いと）あるましいことなりけにあまたとさまかうさまに身をもてない給へきにはあらねとうしろみなき人の中／＼さるさまにてあるましき名をたちつみへかましき時このよのちのよなかそらにみゆるもときも（もとかしきとがとふなりける）。こゝかう世をすてたるに三の宮おなしさまにてすみそめにやつれ給へるを（おなしこと身をやつしたまへる）すゑなきやうにいふもすてたる身には思ひなやむへき事ならねとたたならすさしもやうの物とあらそひ給いけんうたてあるへし（三宮の同じごと身をやつし給へる、すべなきやうに人の思ひ言ふも、捨てたる身には思ひ悩むべきにはあらねど、必ず、さしも、やうのこととあらそひたまはむも、うたてなるべし）」

（国冬本夕霧巻58丁ウ５行～59丁オ６行）

院の言葉の一部を掲出した。青表紙本系との相違が大きいところである（（　　）内に青表紙本を参考に掲出した））が内容を書き換えるほどの独自本文ではない。院は夕霧の名をあえて出さず諌めながらも、皇女としてのあり様を説いている体である。しかし父院の言葉は落葉の宮に重くのしかかったに違いない。

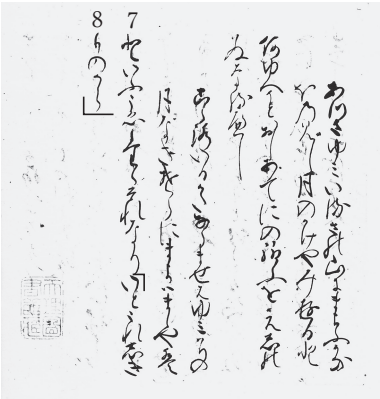
そして前掲13.の大和の守の説得の言葉（**図１**を再度参照）の箇所となる



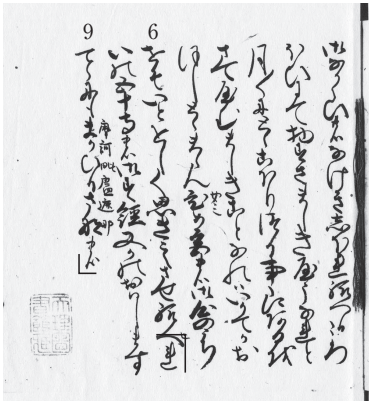
（図４　天理大学附属天理図書館蔵　匂兵部卿巻表(おもて)表紙見返し＋１丁１～５行）

が、途中で国冬本夕霧の巻は終わってしまうのである。この続きは国冬本匂宮巻に墨付き１丁オから続くが（図４参照）、ここで考えたいのは大和の守の説得の言葉で終わっており、その後御法巻の重苦しい紫の上病の冒頭に続くとなるとこの様相でこのまま読み進めた読者はどうなるだろうか？　国冬本御法巻は室町末期写の伝飛鳥井頼孝筆とされており、特段の独自本文を見出していない。

「いまはくにの事も侍（り）まかりくたりぬへし宮のうちの事もまたみ（え）給へ（国冬本夕霧巻60丁ウ　９～11行」（（　）内は青表紙本）の夕霧巻巻末の一行を検証したい。これは大和の守の言葉の一部で、このあとそのまま匂宮巻１丁オに繋がるが、この夕霧巻巻末の一文を、仮にここで完結する文としてみることができるかどうか、試訳を作ることとする。〈大和の守〉「今は私も任地の国に戻らなければなりません。いつまでも御息所薨去の悲哀に引き籠っているのではなく、面倒を見る人がいなくなるこの一条宮邸の状況も今一度ご覧ください」と訳せないだろうか。「また」（もう一度）という本文は国冬本にあり青表紙本系にない本文である。大和の守は落葉の宮のいとこ筋であえて踏み込んだことを話し説得したと考えられるので、この実際は分断された一文でも意味が通らないわけではない。大和の守の説得に対し落葉の宮の返事は書かれないままに夕霧巻は巻を終わり、一転して御法巻の重苦しい巻が幕開ける。落葉の宮が帰京したかどうかは、ついに夕霧と再婚したかどうかは描かれぬままに、しかし今まで読み続けてきたことで



（**図５**　国冬本花の宴巻巻末16丁ウ）



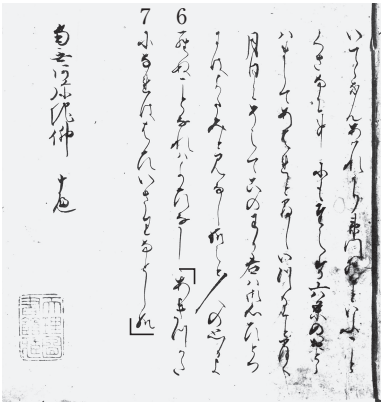
（**図６**　天理大学附属天理図書館蔵国冬本若菜下巻巻末128丁オ）

固まりつつある落葉の宮の人物像を考えると、拒絶の体は取りつつも結局は流されるままに流されたろうと想像がつくところである。源氏物語の話型としては「後見なき王統の女の救済」(注9) が繰り返されたということであろう。現存国冬本の全体像を知り源氏物語の全貌を知っている者以外は、唐突な終わり方ではあるが、逆に新鮮な終わり方とも映った可能性がある。なぜなら源氏物語の唐突な巻末には前例があるからである。国冬本でみてみよう（前掲図５・図６参照）。

花の宴の「いとうれしきものから」（７～８行）の粋な好き人源氏の独り言のような巻末は政敵の娘との秘め事が今後どういう嵐を呼ぶかを読者に逆に様々に想像させるものである。若菜下巻の「れいの五十寺の御誦経又かのおはします（御）てらにもまかひるさなの」で終わっている。この巻末について袴田光康は「何らかの事情で後文が脱落した可能性もあるが、次の「柏木」巻でも青表紙本系統の本文は同様の形態であり、ここも中断の表現を以て擱筆と見たい」(注10) と述べる。この一文については特段の独自本文も他写本にみられず、稿者も首肯する。

柏木巻巻末は河内本の大量の独自本文があり、青表紙本・河内本との相違が大きい箇所である。

国冬本は図７６～７行、「あきつかたになれははひいさりなとし給」が文末になる。国冬本鎌倉末期のうちの９冊はこのように「南無阿弥陀佛　十



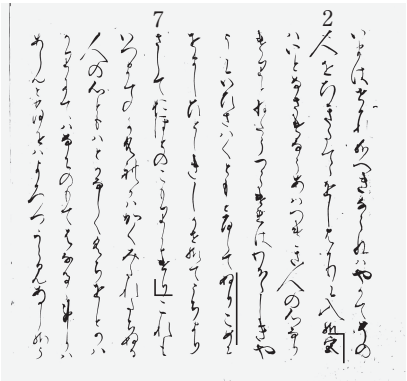
（**図７**　天理大学附属天理図書館蔵国冬本柏木巻巻末45丁オ）

遍」が巻末に残り、この文と本文の間に間があるので柏木巻は確かに巻末と分かる。青表紙本系のように「ゐさりなと」と言いさしでもない。

以上３つの源氏物語巻末の例を挙げてみたが、こうしてみると国冬本夕霧巻巻末は空白行もなく余韻も無く、紙の端ぎりぎりまで大和の守の言葉があるので巻末としては違和感は無いとは言えない。

ここで書写者の問題も考えなければならない。国冬本は全体として伝本の質は優良とはいいがたく、特に鎌倉末期写伝国冬筆12冊に比べ、室町末期写の各筆42冊は書写者の質がばらばらで、例えば錯簡したままの橋姫巻（伝西洞院殿時慶朝臣筆）の本文について注１岡嶌は「十数箇所において半葉中途で意味が通じなくなる。これをそのままに書写するということは、たとえ源氏物語の中身をしらなくとも、読んで文脈を理解して写しているものには耐えられないことであろう。全く本文を読まず、ただ文字を写すだけという、このような書写者の姿が浮かび上がってくるのではないか」と述べるような有様である。ただ夕霧巻（そしてその約三分の一を収納する匂宮巻）は鎌倉末期伝国冬筆でありこれには当たらない。そうなると夕霧巻のこの巻末は、職人としての意識のみをもち物語の流れを知らぬ書写者の起こしたものではなく、混乱した江戸期の全冊の改装の際に偶発的に起きてしまったものといえる。元々は夕霧巻として脱落無く完備していたのであろう。今は欠落して存在していない匂宮巻も、以前は必ず存在したであろう。

ただしそこに至る過程はどうであれ、国冬本が現在のような様相として定



（図８　天理大学附属天理図書館蔵　国冬本匂兵部卿５丁ウ２～７行・塗籠事件の箇所）

まったこと、そしてそれが生むものについて稿者は読み進めてきた。それに従って進めると、読者は国冬本夕霧巻末で、書かれてはいなくても落葉の宮の未来を予見し次の巻に進むであろう。するとこの読者は例の塗籠事件の一件を落葉の宮が起こしたことを知ることがないのである（前掲15　図８）。塗籠の一件がない。但し無いとはいっても現存の国冬本匂宮巻にはある。ただ分断されている為に源氏物語を読んでない読者がすぐに気づくかどうかは不明であるということはできるだろう。図８の翻刻をあげる。

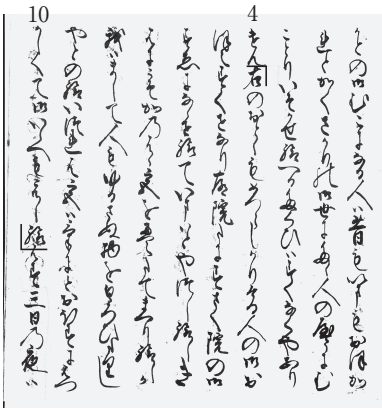
宮はいとなさけなく（心憂く情けなく）あはつけき人のこころなりけりとねたうつらけれはわか／＼しいやうにいひさはくともと思してぬりこめにをましひとしき（ひとつ）しかせ給てうちよりさしておほとのこもりにけり（国冬本匂兵部卿巻５丁ウ２行～７行・傍線稿者）

母屋や廂に設けられた四方を壁で囲まれた塗籠は、当時の猫が持ち上げ柏木が女三宮を垣間見ることができた御簾や几帳のような、移動可能で開放的とも言える空間とは全く異なる、閉鎖的な空間といえる。通常は物置のように使用されたと言われている。貴顕の女性主人が住まう屋敷は思えば、屏風や障子のような薄くて弱いもので仕切られた開放的な場であった。ただしその開放性は当時の男性貴族にとっては有利なものであっても、女性にとってはいつも常に受身で身構えなければならない場でもあった。橋本ゆかりは

「物語史の中で塗籠は女が男からの侵犯を回避するために籠る最後の砦としてくり返し現れる。『源氏物語』の用例七例中六例も、女が男からの侵犯を回避しようとする場面である」と述べる。このうち、四例が落葉の宮と夕霧の話である。男が塗籠に逃げ隠れた例としては源氏が藤壺の寝所に忍んでいった例があるが、結局は逃げおおせて思いを遂げている[注11]。落葉の宮の例は逆に塗籠に逃げ込んだが小少将の裏切りで夕霧は入り込んでしまう。夕霧の手の内についに堕ちるそれ自体に驚きはないけれども塗籠に籠ったのが落葉の宮であることこそが驚きである。彼女はそのような強さを感じさせるような描かれ方をされて来なかったからである。望まぬまま柏木に降嫁ししかし柏木は最後まで本気で向き合わず、軽い扱いを受けながら夕霧の誘いに曖昧な浮名を図らずも残してしまう。心労で薨去した母御息所の喪に服し涙に明け暮れ結局は周りに説得されなすすべもなく夕霧の許に堕ちていく。国冬本夕霧巻巻末で大和の守に説得されて終わる落葉の宮はそういう女性として読者に映る。皇女ではあるが後見の乏しい宮はいとこに大和の守がいるというある種の庶民性に囲まれあらゆる意味で弱い。その宮が塗籠に籠る。源氏物語の塗籠事件と言えば落葉の宮であり彼女を象徴する事件である。他のこの物語の女性たちはこのようなことを行わない。落葉の宮は決して弱い女性ではない。しかしながら国冬本だけ読んでいくと曖昧なまま彼女の物語は進んでいくことになる。この後匂宮巻を読んだ読者が仮に、唐突な文「ゆつるへき人侍らす」で始まる国冬本匂宮巻を読み進め、その読者がそれなりの源氏物語の知識があり匂宮巻が夕霧巻の続きだと分かったとしても、墨付き60丁の夕霧巻に対し25丁の匂宮巻は、その不均等な分断ゆえに夕霧巻が本編で匂宮巻が続編のような体となっており、とってつけたような後日譚的にすら映る。いずれにしろ国冬本で読み進めると落葉の宮の意外な強さは他の伝本のようには表れないのである。

三．匂宮巻の欠如による影響から宿木巻へ―夕霧と落葉の宮の関係

この章では国冬本には匂宮巻本文が欠損していることが、本稿で追求してきた落葉の宮と夕霧の問題にどのような影響があるかを考え、それが落葉の宮のこの物語の最後の登場である宿木巻の夕霧と落葉の宮の描写にどう繋がっていくのか考えてみたい。第２章前掲18.　の「丑寅の町に、かの一条の



（**図９**　国冬本宿木巻103丁ウ４～10行）

宮を渡したてまつる。三条殿と、夜ごとに十五日づつ、〈夕霧〉うるはしう通ひ住みたまひける」（匂兵部卿巻）と青表紙本以下諸伝本にある表現が、一つ国冬本のみ匂宮巻本文を欠く故に、国冬本には存在しない。このことは注２の拙稿でその意味を論じたがそこでも触れた通り、元々匂宮巻を含めた「匂宮三帖」はかつて別人作者説もあった胡散臭い存在の巻であった[注12]。匂宮巻は今までの登場人物を総花的登場と彼らの光源氏以後の動向・そしてその子孫の代の匂宮薫大将の紹介等色々な記事が収録される記事であるが、前掲18.　の本文もそれにあたる。夕霧は雲居の雁と落葉の宮に平等に通ったということを述べている。さすがにまめ人らしいという記事で、幼馴染で最初の夫人も内親王であった方も平等に大切にしたという内容で、まさに前述のとおりその動向紹介記事に過ぎない。いずれにしろ国冬本にはこの巻は、表紙に「匂ふ兵部卿」の題簽の冊子はあるが、中身は述べてきたように夕霧巻の残り約三分の一であり、匂宮巻本文は存在しない。

落葉の宮のこの物語登場最後の場面が宿木巻の、薫大将の女二宮降嫁という出来事について、既に右大臣になっていた夕霧は落葉の宮に次のように語りかける場面である（第２章　前掲20.　図９）。

右の大臣もめつらしかりける人の御おほえすくせなり故院たにすさく院の御すゑにならせ給て、今はとやつしたまひしきはにこそ、かのはゝ宮をゑたてまつりたまひしか我はまして人もゆるさぬ物をひろひたりし

や」との給いつれはけにとおほすにはつかしくて御いらへもえし給はす（前掲箇所・傍線稿者）

翻刻を掲出してみたが特段の異同はない。夕霧の驕慢ともいえる物言いに落葉の宮は本当にそうだと感じつつ恥ずかしさに返事もしなかった、と結んでいる。夕霧が「ひろ」ったのは落ち葉ということで、「下臈の更衣腹」であって未亡人である人と降嫁ともいえない結婚をした自分と比べると、同じ光源氏の子息ながら薫とはなんという違いであろう、と夕霧は自嘲気味であるが、それにしても皇女を拾うとは礼を失した物言いにもみえる。「光源氏の女性関係を反復しながら、落葉の宮の心をつかむことが出来ない夕霧の物語」(注13) であり所詮この夫婦関係はこういうものかもしれないが、他方、夫婦として落ち着いた関係になり（月に半分最初の夫人と全く平等に通う）やや過ぎた物言いも許される夫婦になったとも言える。夫婦のことは夫婦にしかわからないがともかく言えるのは、落葉の宮の源氏物語最後の印象は、慎み深くて自己主張もせず（皇女としての嗜みともいえるが）静かなものであるということである。とりわけ国冬本で夕霧巻の分断で残りの三分の一を気づかない・または後からわかることになる読者にとっては、塗籠事件の衝撃を受けない・または後から後日譚的に知るために、他伝本とは異なる落葉の宮像をもつ可能性があるのである。

四．終わりに

以上本稿では国冬本夕霧巻の本文の分断された様相をもとに、そこから生み出されるものについて論じてきた。本文の状況として考えたとき、ひとまとまりの本文が分離して別の表紙の中に装丁されていたりすることは好ましいこととは思われない。しかし図らずも生まれてしまった状況が新しい読みの可能性を生むとするなら無視していいとも思われない。これもまた一つの源氏物語として我々の前にある。

源氏物語本文の引用は、天理大学附属天理図書館蔵の複製を主に使用し、適宜『新潮日本古典集成』（青表紙本系・大島本）・『花散里・朝顔・落葉の宮』（人物で読む源氏物語14上原作和編　勉誠出版）（青表紙本系・大島本）・

『源氏物語大成』（池田亀鑑）・『源氏物語別本集成』（伊藤鉄也）を参照・併用し、巻数と頁数を付した。その他便宜的に句読点や下線等を施したところがあり、その都度必要に応じてそのことを記した。

本稿を成すにあたり、貴重な天理大学附属天理図書館蔵国冬本源氏物語の掲載や部分翻刻をお許し下さった同館に深謝申し上げる。

注

（注１）　岡嶌偉久子「源氏物語国冬本―その書誌的総論」（『ビブリア』100号、1993年10月）、鈴木一雄監修・永井和子編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識』㉖横笛・鈴虫　至文堂　2002年、 p229～255に転載、『源氏物語の写本の書誌的研究』（おうふう、2010年）が国冬本源氏物語の書誌の基本文献。なお国冬本の研究史に関しては岩下光雄、中村義雄、五島和代、岡嶌偉久子同書、伊藤鉄也『源氏物語受容論序説』桜楓社、1990年10月）、工藤重矩などの一連の論考がある。2014年以前は管見の及ぶ限りを拙著『国冬本源氏物語論』（武蔵野書院　2016）p28-30にまとめた。

（注２）　拙著の第２章第５章に最初の二つの問題への考察を収録。匂宮巻の問題については拙稿「欠如で幕開ける物語―国冬本源氏物語匂宮巻について―」（『物語研究』20号、2020年３月31日（刊行予定）に掲載予定）に述べた。

（注３）　伊藤鉄也『『源氏物語』の異本を読む―「鈴虫」の場合』（臨川書店　2001年）

（注４）　注（２）拙著 p252の表を一部修正。

（注５）　加藤昌嘉「源氏物語のさまざまな本文」（鈴木一雄監修・伊井春樹編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識』㉓夕霧　至文堂　2004年、 p255～256）。加藤はここで「「夕霧」巻に限ってみても、本書が底本とした青表紙本の大島本と、河内本・別本の諸本を比べると、それぞれ約一八〇〇箇所以上にも及ぶ異同がある」と述べ、ほとんどが助詞の有無や誤字脱字であっても中にはそうとは言えない意味のあるものについて例を挙げて記している。夕霧巻自体が伝本によらず多様な本文をもつようである。

（注６）　室伏信助監修・上原作和編集『人物で読む「源氏物語」―花散里・朝顔・落葉の宮』（勉誠出版　2006）の p87～119の「落葉の宮物語」（抄録・青表紙本系・上原作和校注／掲出本文は同書からのもの。落葉の宮の登場が分かりにくい部分は適宜本文を挙げた）をもとに、林田孝和・原岡文子他編『源氏物語事典』（大和書房　2002）の高木和子「おちばのみや【落葉の宮】」p99を参照しつつまとめた。

（注７）　注（６）前掲書の p345～350「落葉の宮―研究史」（池田節子）にある、土方洋一「〈姉妹連帯婚的発想〉」（『源氏物語のテクスト生成論』笠間書院　2000年初出1989年）。

（注８）　注（７）前掲書の p345～350「落葉の宮―研究史」（池田節子）にある、藤村潔「宇治十帖の予告」（『源氏物語の構造』桜楓社1966年　初出1964年）。

（注９）　注（６）前掲の林田孝和・原岡文子他編『源氏物語事典』大和書房　2002年）の高木和子「おちばのみや【落葉の宮】」p99。

（注10）　袴田光康「摩訶毘盧遮那の―巻末の省筆」鈴木一雄監修・日向一雅編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識』㉟若菜下（後半）（至文堂　2004年、p211）

（注11）　橋本ゆかり「ぬりごめ【塗籠】」p315（注６前掲林田孝和・原岡文子他編『源氏物語事典』大和書房　2002）、同「源氏物語の「塗籠」―落ち葉の宮のリアルの生成と消滅」（室伏信助監修・上原作和編集『人物で読む「源氏物語」―花散里・朝顔・落葉の宮』（勉誠出版　2006年）p275-284。

（注12）　匂宮三帖の成立論は古注釈からあったとされれるが、武田宗俊「『竹河の巻について―その紫式部の作で有り得ないことについて」（『源氏物語の研究』岩波書店　1954）、石田穣二『源氏物語論集』1971年などの源氏物語成立論の代表的論者によってなされた研究史がある。

（注13）　注（６）前掲の林田孝和・原岡文子他編『源氏物語事典』（大和書房　2002年）の高木和子「おちばのみや【落葉の宮】」p99。

（こしのゆうこ・元福州大学外国語学部日本語科教員）